
異常性欲

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常性欲

【Nコード】

N2412Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

近い未来、こども向けに発売された「おともだちロボット」汎用性が高く、高機能なそのロボットは、人々に様々な用途で利用されていた。

ついには小児性愛者の欲を満たすためにも利用されるが、法による規制で、独身者にはロボットが手に入らなくなってしまう。ロボット購入のための形式的結婚を考えた、少し異常な男女のやりとり。

※「たんたんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品
です

(前書き)

直接的な表現はまったくありませんが、いわゆるロリコンが登場します。

そういったことを極度に嫌う方は、読まれないようにお願いします。

幼児から児童までを対象としたロボット「おともだちロボット」は、三歳から十歳までの男児、および、女児の姿をしたものがラインナップされており、まだ言葉がおぼつかなかったり、少しやんちゃなところがあったり、家の用事を積極的に手伝おうとしたりとそれぞれに様々な特徴があった。

会話も運動も、ある程度はあらかじめインプットされているが、さらに周囲の人間やロボットとのコミュニケーションで対話的に学習することもできる。

外見は、人間と見間違ふほど精巧に作られており、表情や仕草なども本物の人間のこどものそれと区別がつかないほどであった。

当初、こどもたちの遊び相手となることを想定して発売されたそのロボットは、こども向けとは思えないほどの高性能と、その愛らしさから、すぐに評判を高め、爆発的な人気であったという間に多くの家庭に普及していった。

こどもの遊び相手として以外にも、その世話をするベビーシッターのように利用したり、家事の手伝いをさせたり、あるいは子のいない夫婦が代替として購入することもあった。

メーカー側も、防犯機能をつけたり、料理ができるモデルを開発したり、兄弟のように振る舞う機能をつけたりと、次々に新たなロボットを生み出していった。

そして「おともだちロボット」は、社会問題を引き起こすまでに至った。

小児性愛者、あるいは、その傾向にある者たちが、このロボットを購入し、性的な行為の対象とする者まで出てきたのだ。

ロボットには性器も排泄器官も作られていないのだが、これらを改造して取り付ける業者も存在した。

その異常性に、一部の団体から大きな反発が起こり、ついには法的な規制が導入された。

メーカーや市民からは反対の声もあがったが、「おともだちロボット」は、十八歳以上の夫婦のみが購入可能で、改造や転売は一切不可として、違反者は刑罰の対象とされるようになったのだった。

郊外の駅の前、ロータリーの隅で、携帯電話を片手にTは人を待っていた。

結婚をしていなくても、非合法に「おともだちロボット」を手に入れる方法はあったが、一方では、合法的に手に入れるために結婚をする人々があり、Tもそれを希望していた。

結婚に対しては、やはり特別な見方をする者も多かったが、書類上の結婚や離婚を気にも留めない者も多く、彼らはインターネットサイトでその相手を見つけ、婚姻届を出し、書類を揃えた上で合法的に「おともだちロボット」を購入するのだった。

Tは今、その結婚相手を待っていた。

形式上の結婚であり、今日婚姻届にサインをして提出すれば、もう会うことはないかもしれない相手だったが、いざ会うとなると、どんな相手なのか妙な期待をしてしまう。

自称二十代後半の女性だったが、先ほどから、そのくらいの年齢の女性が近くを通る度に、品定めするようにその顔を見てはまた携帯電話に目を落とすことを繰り返していた。

約束の時間からは、すでに十五分ほど経過しており、Tがもう帰ろうかと思った矢先「Tさんですか」と声をかけられた。

声のあった右側を向くと、二十代後半どころか、十代後半にも見える女性がTを見つめていた。

Tが小さな声で返事をする、女性は首をすくめてはにかみながら遅刻を謝罪した。

男性にしては小柄な方のTの肩にやっと届くほどの身長、もう桜も

散る頃だというのに薄手のコートにマフラーを巻いているが、痩せ型だと思えた。髪は黒く艶やかで、反対に顔は青白かったが、その瑞々しい肌からは不健康そうな印象を感じることはなかった。

こんな結婚に合意するくらいだから、非社会的で性格も暗い相手なのだろうと予想していたこともあり、目の前ではにかなでいる女性にTは少し戸惑っていた。

「はじめまして、Hです。あの、思ったより普通なんですね。あ、すみません、失礼なことを言ってしまった」Tが彼女に対して思ったようなことを、その女性、Hは口に出したが、すぐに慌てたような素振りで口元を隠すように手を当てた。

TとHは、駅近くの居酒屋のテーブル席に座った。

「お時間が大丈夫でしたら、どこか座りませんか」というHの言葉に、Tは喫茶店にでも入るものと思っていたが、Hはすぐにこの居酒屋を選んで、さっさと入ってしまったのだった。

「どのモデルを購入される予定ですか」乾杯を済ませると、HはTにこう聞いた。ロボットのモデルのことだ。

「ああ、九歳の生意気タイプか、十歳のおてんばタイプにしようかと……」こんなことを人前で口にすることを恥ずかしく思いながらも、Tは正直に答えた。

「同じですね、わたしも九歳の生意気女児がいいかなと思っているんです」

自分が女兒に対して性的な興味があるように、女性は男児に対して同様なのだとばかり思っていたが、女性が女兒に対して、ということも確かにあるのだろう。Tはこう考えていたが、Hはさらに続けて言った。

「ずいぶん前のことですけど、両親と妹を事故で亡くしてしまって、妹がその時九歳だったんですよ。生きていれば……二十三歳かな」

Hはその事故によって家族を失ってしまった。当時はまだ中学生だったが、転校は嫌だったため、ひとりで自宅に住むことを選んだが、

父方の祖父母が田舎から出てきてくれて、一年ほどいっしょに住んでいたと言う。その後は寮のある高校に進学し、以降、現在に至るまではずっとひとりで暮らしているとのことだった。

このHの話に、Tただ曖昧な相槌を打つことしかできずにいた。

そして、今日会ったばかりの、そして今後会うかもわからない自分に、どうしてこんな話をしてくれるのかわからず、また、自分のように不純な動機で「おともだちロボット」を欲しがっているのではないということがわかり、Tは戸惑い、どこか居心地の悪さを感じていた。

このままでは「Tさんはどうしてロボットが欲しいんですか」などと聞かれるかもしれない。それはまずいと考えたTは、Hの話が終わったところで、すぐにHに問いかけた。

「それなら、今回の話はやめた方がいいのではないですか」

Tは結婚相手について、自分と同じような理由でロボットを欲しがっている、自分と同じようなタイプの人間だろうと思っていた。

しかし、それはまったく違っていった。

異常性など見られない普通の女性のようにだし、それならば多くの男女と同じように恋愛をして結婚をした方がいいのではないか、とTは考えたのだった。

なにより、このような相手では、T自身が申し訳なさを感じてしまつて、書類上のことであつても、結婚などできそうになかつた。

「やはりわたしでは駄目でしょうか」Tの言葉に、Hはこう返した。駄目だということではない。履歴に傷がつくことになるし、そういったことはちゃんと考えたのか。ロボットが欲しいだけなら、他にも方法はある。Tは自分のことを棚に上げて、説教じみたことをHに説いた。

それでも、少し不思議そうな顔をしてTの目を見つめるHに、Tは自分の性癖や結婚の目的を、恥ずかしさと焦りで時折吃りながらも正直に話した。言うだけ言ったら、金を置いて店を出て逃げてしまおうと思つていた。

しかし、Tが話している途中で、Hが言葉を挟んだ。

「わたしは結婚したら、いっしょに住んで、離婚をする気もありますんでしたが、Tさんは違うということでしょうか」

Tはこの言葉に少し驚き、声を出さずに頷いて見せたが、それに構わずHは言葉を続けた。

「わたしは体も小さいし、胸もあまり大きくないですし、年齢よりはかなり若く見られますが、やはりもうこの年だと難しいでしょうか。こういった結婚のことを知った時に、ちょうどいいと思ったんです。妹も欲しかったですし、旦那様も欲しかったので。わたしをかわいがってくれる旦那様が欲しくて。そうしてくれそうな年上の方とお付き合いをしたこともあります。本音を話したら逃げられてしまったり、こども扱いであつても結局は恋人として見られてしまったり、思うようにいきませんでした。もっとこう、肉親に近いような感覚でかわいがって欲しいんですよ。親戚や近所の女の子を、異常なまでにかわいがるようなイメージが近いと思います。でも、だからって、性的な行為は駄目だというのはなくて、むしろそれは積極的にして欲しいくらいです。でも、その最中も恋人、異性を愛するようなものではなく、こどもをかわいがるように愛して欲しいんです。それで、ずっと思っていました。その、失礼ですが、Tさんのような性癖を持つ方だったら、わたしの思うようにかわいがってくれるかなと。あういうロボットを、そういう目的で欲しい方なら、所有欲とか支配欲とか、そういうったものがあると思いますし、ロボットと同じように、わたしもかわいがってくれる、妹もかわいがってくれるだろうと思っただけです。もし結婚はできないということでしたら、結婚も妹も諦めます。それで、Tさんもロボットを購入できなくなってしまうますが、代わりにわたしをかわいがっていただけないでしょうか。仕事はありますので、生活費の面で負担をかけることはありません。いかがでしょうか。その、できれば妹も欲しいので、結婚をしていただけとうれしいです。それはTさんもお望みのことだと思いましたが、違いますでしょう

か。やはり欲しいのはロボットだけで、わたしは不要でしょうか。わたしは、旦那様が欲しいのです。かわいがってくれる旦那様が。妹も欲しかったので、今回の結婚については、わたしの希望通りでした。Tさんのような方なら、わたしをかわいがってくれるかと思っています。Tさんなら、わたしをかわいがってくれます。結婚という形が難しいのであれば、他の形でも構いません。そうすると、Tさんはロボットを手に入れられませんが……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412y/>

異常性欲

2011年11月13日09時08分発行